【パネル討論1】

貧困のジェンダー差

阿 部 彩

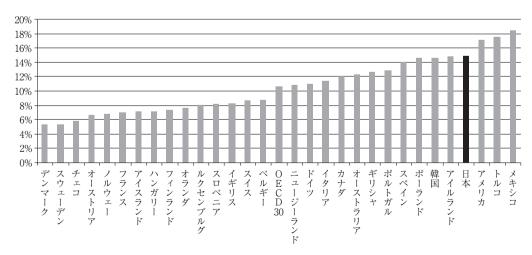


皆さん、こんにちは。いくつかの非常におもしろい論点を午前中から聞かせていただきました。私は当研究所で、貧困研究を専門としておりますので、貧困という観点から、それから、男女格差という観点からい

くつかの統計データを提示させていただき、最後に3つ質問という形でこの後のパネルディスカッションに続くような問題提起をさせていただければと思っております。約20分、お耳を拝借いたします。よろしくお願いしたします。

まず、もう皆さまがよくご存じのようなデータ と思いますが、日本の貧困率のOECD諸国との比 較から始めます(図1)。これによりますと、日本は上から4番目で、OECD、30カ国の中でも決して貧困率が低いとはいえない国であるということを示しております。ちなみに、ここで使われたデータは2004年のときの所得データです。2004年は今から見ますと比較的に経済状況が良い時期でございました。ですので、リーマン・ショック後、特に経済低迷がある中、この率がさらに悪化していることはもう必至のことではないかと思っております。

図1は老若男女すべての人を合わせた貧困率の話ですが、それでは日本は男女間の貧困率の差という観点からは、国際的に見てどうなのでしょう。表1は、ゴルニック先生が書かれたペーパー(Gornick & Jantti 2010) にありましたデータに、



出所) OECD (2008)

図1 OECD (2008) による貧困率 (社会全体)

表1 相対的貧困率:

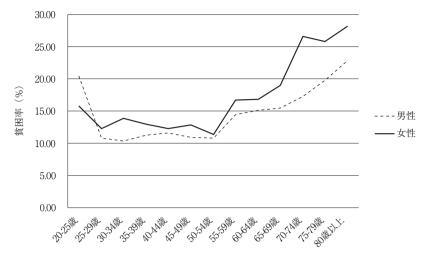
| | 可処分所得の貧困率 | | | | 可処分所得の貧困率 | | |
|------------|-----------|------|-------|-------------------|-----------|-------|-------|
| | М | F | F-M | | M | F | F-M |
| アングロサクソン諸国 | | | | 南欧 | | | |
| オーストラリア | 11.0 | 12.7 | 1.7 | ギリシャ | 8.9 | 9.9 | 1.0 |
| カナダ | 10.3 | 12.6 | 2.2 | イタリア | 11.2 | 12.0 | 0.8 |
| アイルランド | 10.6 | 13.5 | 2.9 | スペイン | 8.3 | 10.2 | 1.9 |
| イギリス | 8.5 | 11.0 | 2.5 | 平均 | 9.4 | 10.7 | 1.2 |
| アメリカ | 11.0 | 13.9 | 2.8 | ラテン・アメリカ | | | |
| 平均 | 10.3 | 12.7 | 2.4 | ブラジル | 17.3 | 18.3 | 0.9 |
| 大陸ヨーロッパ | | | | コロンビア | 16.9 | 19.1 | 2.2 |
| オーストリア | 5.7 | 6.5 | 0.9 | グアテマラ | 22.1 | 21.4 | - 0.8 |
| ベルギー | 4.5 | 6.6 | 2.1 | メキシコ | 17.1 | 17.4 | 0.3 |
| フランス | 5.0 | 6.2 | 1.2 | ペルー | 21.9 | 22.3 | 0.4 |
| ドイツ | 5.4 | 7.1 | 1.7 | ウルグアイ | 14.9 | 15.5 | 0.6 |
| ルクセンブルグ | 5.0 | 6.5 | 1.6 | 平均 | 18.4 | 19.0 | 0.6 |
| オランダ | 2.7 | 4.6 | 2.0 | | | | |
| 平均 | 4.7 | 6.3 | 1.6 | 日本(年) | | | |
| 北欧 | | | | 1995 | 9.63 | 11.03 | 1.40 |
| デンマーク | 3.8 | 3.2 | - 0.6 | 1998 | 9.79 | 11.65 | 1.86 |
| フィンランド | 4.7 | 3.3 | - 1.5 | 2001 | 11.52 | 13.12 | 1.60 |
| ノルウェー | 4.7 | 3.8 | - 1.0 | 2004 | 10.04 | 11.94 | 1.90 |
| スウェーデン | 5.4 | 5.0 | - 0.3 | 2007 | 10.96 | 12.61 | 1.65 |
| 平均 | 4.7 | 3.8 | - 0.8 | | | | |
| 東欧 | | | | average all years | 10.39 | 12.07 | 1.68 |
| ハンガリー | 7.4 | 6.8 | - 0.6 | | | | |
| スロベニア | 7.3 | 5.8 | - 1.5 | | | | |
| 平均 | 7.4 | 6.3 | - 1.1 | | | | |

出所) 日本以外, Gornick & Jantti (2010) "Women, Poverty and Social Policy Regimes: A Cross-National analysis" LIS WP 534

日本:阿部 (2010), 元データは「国民生活基礎調査」より筆者推計。

日本の5カ年分のデータを合わせたものです。ここで出している貧困率は、再分配後の可処分所得で計算したものです。Mが男性、Fが女性、F-Mが男性と女性の貧困率の差です。これを見ると、1995年から2001年にかけて全体の貧困率は上昇、

その後若干減少しています。この間,男女格差が 上昇しているかを見たかったのですけれども,こ のデータで見る限り,確実に上昇しているという 状況を見ることはできません。男性の貧困率も女 性の貧困率もほぼ同じようなペースで推移してい



出所) 男女共同参画会議監視・影響評価委員会「生活困難を抱える男女に関する検討会」 資料 (2009.7.31.)

図2 年齢階層(5歳刻み)別・男女別 貧困率(平成19年)

ると言えます。

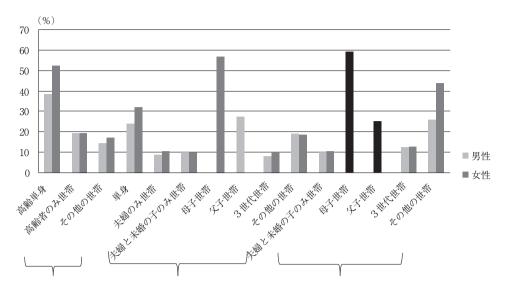
5カ年の貧困率の男女差を平均すると1.68になるのですけれども、この数値は大体、大陸ヨーロッパ諸国程度であると思われます。日本の社会保障制度はドイツ型といわれることもありますけれども、貧困や格差の観点からいいますと、非常にアングロサクソン的な数値となりますが、男女差はアングロサクソン国ほど大きいわけではない。しかし、特に北欧に見られるような、男性の方が貧困率が高いというような現象は日本では見ることはできません。

それでは、日本の貧困率の男女差を詳しく見ていきましょう。図2は、男女の貧困率の差を年齢別に見たものです。見ていただければ分かりますように、女性の生涯のほとんどの時期において貧困率は男性を上回っております。これは多くの諸外国でも同じですが、特に日本に特徴的といえるのは高齢期において男女格差が非常に大きくなるということです。図2では、1番最後の年齢層が80歳以上です。ここでは、圧倒的に女性の方がより高齢の方の数が多くなるので、その年齢効果によるところがありますが、70歳代や60歳代で比べても明らかに男女格差が年齢とともに上昇していることが分かります。また、これはちょっと話が全

体的な流れからずれるのですけれども,近年,顕著な兆候としては,20歳から25歳の男性の貧困率が急上昇しているということです。これは2007年のデータですけれども,時系列的に見てみると,明らかにこの山の上昇を確認することができます。

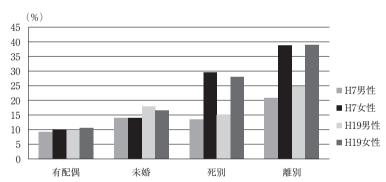
次に、世帯タイプで見てみます(図3)。一見して分かりますが、諸外国と同じように日本でも母子世帯の貧困率が非常に高い。ゴルニック先生のペーパー(Gornick & Jantti 2010)の中で母子世帯の貧困率が1番高かったのは確か35%とか40%という数字だったかと思いますけれども、日本はもう50%以上です。これはOECDのデータでも確認できており、OECD30カ国の中で日本の母子世帯の貧困率は最悪です。それから、単身世帯というのは高齢者であっても、勤労世帯であっても非常に貧困率が高いのですけれども、その中で男女の格差が大きく見られるということです。高齢者世帯は約12~13%の差がありますし、勤労者でも5~6%の男女格差があります。

男女差が生じる要因の一つが、これは落合先生の話ともつながるかと思いますけれども、婚姻関係と女性の貧困が非常に密接に関連しているからです(図4)。図4では、離別、死別の人々は、男性も女性も貧困率は高いことを示しています。



注) 厚生労働省「国民生活基礎調査」平成19年, 母子・父子世帯の子どもの男女別貧困率はサンプル数が 少ないため計算不可





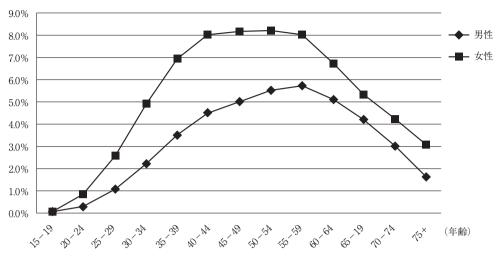
出所:阿部(2010)厚生労働省「国民生活基礎調査」各年より計算

図4 配偶関係別、性別 貧困率(1995, 2007): 勤労世代(20-64歳)

しかし、特にやはり男女格差が大きく違うのが離別、死別の人々です。

日本の人々の婚姻状況は、今、激変しています。岩田先生のご報告でも出たように、日本の男性の生涯未婚率は15.96%、女性は7.25%です。予測されるところでは2020年には男性で26.0%、女性では17.35%となされていますので、結婚しないというライフコースが当たり前のライフコースになりつつあります。結婚しない人が増えているということと、離婚が増えていることは皆さんもご

存じかと思いますけれども、実際に離婚者が社会の中にどれぐらい存在するのかというデータを皆さんはあまりご覧になったことがないかなと思います。これがその集計をしてみたものなのですが、人口に占める離別者の割合です(図5)。男性の方が女性より低いのは、男性の方が、再婚率が高いからだと思われます。女性を見ると、40代、50代になりますと、全女性の8%は離別者なのです。私が、特にこのデータを皆さんの心の隅に置いておいていただきたいと思うのは、離別の話に



出所) 総務省『平成17年国勢調査』表44

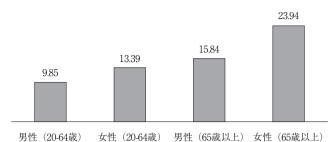
図5 年齢別.人口に占める離別者の割合(2005)

なると、よく母子世帯の話で、母子世帯の貧困率が非常に高いので、子どもの貧困という観点からも政策的にも話題になることが多いのですけれども、子どものない離別の女性の話は全く出てこないからです。子どもが20歳を超えて母子世帯でなくなってしまった女性について、全然、政策的な議論はないのですが、実は、先ほど見ましたように離別者の貧困率は非常に高い。そして、中年の女性であれば1割弱の人々は離別者であるということです。この数字は劇的に増加しています。50歳代前半の女性で見ると、1960年代では2.9%、20年後に4.1%、その20年後に7.3%で2005年には8.2%になっております。

次に、ワーキング・プアの話もさせていただきたいと思います。ワーキング・プアといったときに、近年、よく日本の中で話題に上がったのは若年の男性のワーキング・プアの問題でした。派遣村が一昨年ですか、ニュースとなりました。ゴルニック先生のために解釈いたしますと、これは年末に派遣先から解雇されて、または契約が切れて、労働が切れたと同時に宿舎から追い出される。先ほど、岩田先生の話にもありましたように、宿舎から追い出されることによって、もう身ぐるみ1つで路上に出されるという人たちが年末

に非常に増加したことに対してボランティアの団体が大きなテント村を作ったという事件でした。この派遣村に来たのがほとんど男性であったということもあって、ワーキング・プアというと、若年者で、かつ男性の問題であると思われていることが多いのです。ですが、家事をしていたり、学業をしていたりといったようなパートタイム的という人たちの中で、かつ、個人の所得ではなくて世帯の所得で見ますと、男性より女性の方が貧困率が高く、また勤労世帯よりも高齢者の方が高いのです。65歳以上の女性で働いている人の中の4人に1人はワーキング・プアになります(図6)。

ここまで、いくつかの統計をご紹介させていただきました。まとめると、貧困の男女格差について、日本は他の先進諸国と類似する状況で、場合によっては他の先進諸国よりも悪い状況があるかと思います。女性は男性より貧困に陥りやすい、女性の勤労所得が男性を下回る、ワーキング・プアが多い。それから、家族が重要なセーフティーネットであるため、家族タイプや婚姻状況による貧困率の差が非常に大きく、特に、母子世帯の貧困の状況は深刻ということかと思います。



分丘 (20-04mg) - 久丘 (20-04mg) - 分丘 (00mgを上) - 久丘 (00mg

出所)「平成19年国民生活基礎調査」より推計(内閣府2009)

図6 ワーキング・プアの比率 (%)

ここで、今後のディスカッションの糧にするた め、いくつかの質問を提示させていただきます。 まず、第一に、何が貧困の男女格差を生んでいる のかということです。ゴルニック先生のペーパー の中にあった表で、きょうのプレゼンテーション で使われなくて残念だったものがあります。それ が、男女の学歴別の貧困率の表です。それを見て みますと、アングロサクソン諸国では、低学歴の 女性と低学歴の男性の格差は非常に大きいのです が、高学歴の女性と高学歴の男性の格差はそれほ ど大きくないのです。一方で北欧では逆で、低学 歴者に限ると女性の貧困率が男性より低いという ことがありました。これが日本ではどうなのかと いうことが、非常に気になるところです。残念な ことに、私は学歴別の男女別の貧困率を統計とし て持っておりませんので、これはぜひ、今後の研 究課題として考えていきたいと思っています。つ まり、高学歴化すれば、女性は貧困から逃れるす べを身につけるのかということです。ここのとこ ろについて、今、日本の状況はどうなのか、落合 先生、岩田先生、橘木先生、もし、ご示唆があれ ば、ぜひ、教えていただきたいと思います。

男女格差を生む、もう1つの経路が労働市場です。落合先生の話の中でも出てきたような、労働市場におけるジェンダー規範が挙げられます。それが問題なのか。つまり、同じ能力を持っていても労働市場においてその能力が同じように評価されないということ、または同じように発揮できないワークライフバランスの問題なのかと、そこのところももう少し検証する必要があるのかと思い

ます。

最後の経路が家族です。何回も出てきますけれ ども、日本の中で、貧困の最大のセーフティー ネットは家族でした。それが崩壊してきたとき. 機能が低下してきたときに、女性の方により多く しわ寄せが来るのか、それとも、男性なのかとい うことです。もちろん、離別の男女を見た場合に は女性の方が貧困率が圧倒的に高いので、女性の 方がしわ寄せが多いと考えられることもありま す。でも、一方、貧困、孤立、社会的排除という 観点から見ますと、女性の方が家族ともつながり やすいですし、ネットワークも保持するのです。 女性は、例えば、本当に困ったときに、自分の親 のところに、すみません、助けてといったり、家 族でなくてもきょうだいであったりとか, いろい ろなつながりが持てたりすることが男性より多い ということで、家族が崩壊したときに、もしかし て、より影響が多いのは男性の方なのかもしれま

2つ目の質問は今後、貧困の男女格差は縮小するのかということです。データ的には、これは縮小するのではないかと思われるような動向が見えています。これは女性の貧困率が下がったからではなくて、男性の貧困率が上がってきたからです。残念ですけれども、今後、男性も女性も貧困化することによって男女格差がなくなっていくという皮肉な結果があるのか、もし、ヨーロッパ諸国や他の国、LISなどで示唆があれば、ゴルニック先生、ぜひ、教えていただきたいと思います。

3つ目の質問が、男性の貧困と女性の貧困はど

こが違うのか、という点です。今日、私が使わせていただいたものやLISのデータなども、所得という1つの観点だけから測られる貧困ですけれども、本当の生活困難とか、それによる健康被害ですとか、貧困の諸側面を見たときに、男性の貧困と女性の貧困はやはり根本的に違う要素を持っているのではないかと思われます。例えば、女性では特に貧困と暴力の関係が密接であったり、性産業や社会の暗い部分に吸い込まれていくようなところが非常に多かったりして、それが女性の貧困をより見えにくくしているわけです。

また、長期的な観点からも女性と男性の貧困は 異なる可能性があります。特に、女性の貧困の慢性化、長期化が気になるところです。男性の貧困 は景気が良くなれば回復するものなのかもしれま せんが、女性の貧困はより構造的なものがありま す。日本の中での貧困のパネル研究は実は岩田先 生が紹介してくださった、家計経済研究所のデー タによる研究の蓄積があるのですが、このデータ は対象が女性のみなので、比較できません。男性 も含めて、長いパネル調査はほとんどないのです。ですけれども、やはり、この慢性化、長期化という観点から、女性の貧困と男性の貧困は根本的に違うのではないかと思われます。LISは、クロス・セクショナルな調査ですが、もし、他の外国でもこのような研究があるのであれば、ぜひ、その結果を教えていただきたいと思います。以上で、私の報告といいますか、質問とさせていただきたいと思います。ご静聴、ありがとうございました。

参考文献

Gornick & Jantti (2010) "Women, Poverty and Social Policy Regimes: A Cross-National Analysis", Luxembourg Income Study Working Paper No.534.

OECD (2008) Growing Unequal? OECD, Paris. 内閣府男女共同参画会議監視・影響評価専門委員会 「生活困難を抱える男女に関する検討会」資料 2009年7月31日

> (あべ・あや 国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部長)